
思いつき集

Scarlet ZoomAir After The Fainal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思いつき集

【Nコード】

N0086X

【作者名】

Scarlet Zoom Air After The Final

【あらすじ】

私の思いつきです。ちょびちょび更新する予定。

『TOLover』俺の朝

「メンドクセエなあ、オイ。」

ある晴れた日、ある一室にある布団から這い出た一人の男が、いかにも眠たいと主張するように眼を擦りながら言の葉を吐き捨てた。

男がいる部屋は自身が今座っているベッド以外にはパソコンとクロ―ゼット、机しかない質素な部屋だ。しかし、その部屋の壁も机もパソコンなども全て黒色で埋め尽くされており、黒色以外の物は自身を着ている服か壁に貼り付けてある自身が好きな歌手グループのポスターぐらいしかない。

「龍兄起きてる？」

そんな言葉とともに部屋に入ってきた少女。名前は『結城 美柑』ユウキ ミカン。とって、俺の妹だ。
そういう俺は『結城 龍樹』ユウキ リュウジュ。美柑の義理の兄だ。

「ああ、一応は起きてるぜ。準備ができたら下に降りるわ。」

俺が寝起きでうまくでない声を呟く程度に出すと、美柑は了承の意

を伝えながら下に降りていった。

美柑が下に降りると同時に俺は背伸びをし、欠伸をしながらもクローゼットの中にある制服に裾を通していった。

「ういゝ、美柑さんや。リト吉はまだ起きてねえのか？」

「うん。リトは寝坊助だから仕方がないよ」

結構なことを言う小学五年生だ。まあ、そんなことはおいておいて、とにかく俺は髪の毛をセッティングしに洗面所に行く。はつきりいって俺の髪質はめっちゃくちゃ良い。サラサラの髪質に微妙な癖毛。ちょっとクラスの女子にも羨ましがられたことがあるぐらいだ。

そんな髪の毛を濡らし、少し濡れる程度までタオルで水を拭き取る。そのまま髪の毛を後ろに回し、近くに置いておいたターバンをデコにつける。丁度眼の上のあたりにターバンが来て、良い感じになる。そのままターバンを後ろで括り、後ろに回した髪の毛をドライヤーで乾かす。乾くとハードのワックスで髪の毛を立たせる。崩れやすいが、直しやすいというターバンを外してもOKな髪型になる。

そこまですると、洗面所からでてリビングに行く。すると、料理が既に机の上に並べられていた。

「龍兄、リト起こしてきてよ。」

「……俺と一緒に起こせば良かっただろうに……。」

意味が分らん。どうせなら一緒に起こした方が良いだろ。どうせ俺とリトは部屋が隣なんだから。

「忘れてたの！さっさと起こしてきてよ鈍感兄貴っ！！」

「む、それは否定する。俺はどっちかっていうと鋭い方だ。」

物事を客観的に見ている俺が鈍感なわけがないだろう。まったく……とうとう美柑のやつも認知症になっちゃったか……小学生で……可哀想に……」

「うっさい鈍感兄貴！思ってること全部聞こえてる！！」

「（・ω・、）クソガッ」

龍樹はうまく逃げ出した。龍樹は背後からの声を完全に無視した。だが龍樹は何故か泣きそうになった。

まったく、面倒だぜ……。

とにかくリト吉の部屋の前まで来た俺はノックをする。

「リト吉、起きてるか？起きてなかったら母さんにリト吉が美柑

に手を出したって伝えるからな。」

「なんでだよ！普通に起こせよっ！そんなことをしたら俺が社会的に死んじゃうよっ！」

「入るぞー。」

「いや、聞けよっ！って、ちょっと待て！今は……」

遅いはボケ。

そんなことを思いながらリト吉の部屋に入ると、そこには女性らしい凹凸がある体をした、まさしく『女』のリト吉がいた。

「……。」

「……。」

「……また、胸がでかくなったか？」

「でてけーっ！！！！！！！！！！」

まったく、鍵をかけていないのが悪い。俺は悪くない。それに、こんなものことだろうに……

まったく、リト吉は変わらん。

『私とFクラスと歌』私とバカと序章と・・・

） 明久side ）

深夜二時。

僕はこの時間になると毎日パソコンを開く。

なぜ僕がわざわざ好きなゲームをお惜しんでまでパソコンを使っているのか。それにはちゃんとした理由がある。

それは深夜二時十分に始まるとあるネットアイドルの生放送を見るためだ。

「さぁ始まりました。私こと『Scarlet ZoomAir』とっ！」

「『Scarlet Blizard』の二人が送るっ！」

「『Scarlet Sisters』の日常っ!!」

そうっ！

僕はこのScarlet Sister'sの生放送を見るために
大好きなゲームを売ってまでして電気代を払っているんだ。そして、
そんな僕のお目当てはScarlet Sister'sの妹にあ
たるScarlet ZoomAirだったりする。Scarlet
ZoomAirは今、業界で騒がれているネットアイドルだ。
彼女は有名なアニメの声優。映画の吹き替え。有名なアニメの主題
歌などをあくまで副業とし、主な職業は学生。僕と同じ高校二年生
だ。『同じ』といっても向こうは時の人となっている有名人でこち
いは普通の高校生。住む世界が違うけどね。

「ところで『吹雪^{フブキ}』。今日はまず何するの？」

「そうね。予告には歌を歌うって言ってたし……歌からいってま
しょうか。いいわよね、『風^{フウ}』？」

「OK！じゃあ最初は『Scarlet Flame』からで♪」

最初からScarlet Flame！？いや、でも場を盛り上げる
には最適な曲かもしれない。

Scarlet Flameはテンポが早く、ノリやすいというのが
特徴の曲だからね。最初の曲としては宝石かも。

そう言っている間にも曲が流れだし、Scarlet Sister

r、sが歌いだす。

———
S c a r l e t F l a m e ! !

S c a r l e t S i s t e r、sが同時に綺麗にハモリながら歌う。

———
なんでもない朝がやってくる。ああ、今日も始まるんだね、最高の一日が……

S c a r l e t Z o o m A i r、もとい風さんが最初のAメロの部分の優しいメロディを歌いだす。こうして聞いているとなんだかそよ風に頬をなでられているかのような気さえする。

———
悲しみと苦しみの中できみのこえが聞こえる。

曲のBメロ部分をS c a r l e t b l i z z a r d、もとい吹雪さんが歌いだす。Bメロ部分はなんだか少し悲しい感じがするメロ

ディだ。吹雪さんも悲しげな声音で歌う。それはまるで雨のよう。本当に涙をこらえて歌っているんじゃないかと思ってしまうぐらいで、こっちまで悲しくなってしまう。

―― さあ行こう

―― 君と一緒に

―― S c a r l e t F l a m e ! !

いつの間にかもう最後。二人が交互に歌いながら終わりの言葉を口にする。ちなみに言う風さんが最初で二番目が吹雪さん。最後が二人同時にだ。この曲が流れている間にも視聴者のコメントが右から左へと流れていく。それらはどれも彼女たちを褒めたてる言葉ばかりだ。

結局、この生放送が終わったのは五時三十分だった。

） ？？ s i d e （

午前6時。

私は毎日の習慣となっている軽いランニングへと出かける。

職業がら体力もプロポーションのとれた身体でいなくちゃいけないからね。私のランニングが普通の人と違うのは、私がアコースティックギターを持って行くことかな？

まあ、私の好きなことの一つであり、趣味のうちの一つでもある『歌』を歌いに行くからなんだから仕方ないんだけどね。

あ、言い忘れてたね。私の名前は『天川^{アマカワ} 紗津希^{サツキ}』っていうんだ。
ネットアイドルグループのScarlet SistersのScallet ZoomAir、通称『風』をやってるんだ。よろしくね♪

基本的にScarlet Sistersはテレビにでるときは歌手か声優として様々な番組をやってる。でも、私達の本業は学生だから、私達は学生としての時間以外しか活動しない異色のアイドルとして多くの支持を受けている。私はその他にも様々なことをしていたりする。絵を描いて投稿したり、ネットの昔からの友達と合唱したり、自作曲を歌って投稿したり、アニメをネット友達と作って載せたりと……まあ、大抵はネットで遊んでいる。私はネットアイドルだからね♪

まあ、そんな説明しているうちに家から3キロほど離れた人気のない公園についた。この公園は住宅街から離れた場所になり、歌を歌う

には最適の場所だったりする。流石に3キロも走ったから汗をかいているので水道で顔を洗い、首にかけていたタオルで拭いておく。そして、走るときに邪魔で仕方がなかったギターをギターケースから取り出してあげる。

そしてそのまま音の調節へ。一応私はあまり日常に役に立たないという絶対音感を持っているので機械はまったくいらなかったりする。調節が終わると慣らすために業界の友達の曲である『only my railgun』という曲を弾き語りする。

うん、今日も好調みたいだね。続いて私達、Scarlet Sistersの曲の内の一つであるScarlet Frameを弾き語りする。

そんな練習を繰り返していると時刻はもう七時。

そろそろ家に帰ってお風呂にはいらなきゃね。

なんていったって今日は

新しい学校に転入する日なんだから♪

『私とFクラスと歌』私と変更と設定と・・・

『名前』

【本名】天川アマカワ紗津希サツキ

【偽名】天川アマカワ楼雅ロウガ【アイドル名】Scarlet Zoom Air
【アイドル名／通称】風フウ

『性別』

女性

『年齢』

17歳

『クラス』

F

『部活』

帰宅部

『職業』

【正業】学生

【副業】ネットアイドル、声優

『趣味』

歌を歌うこと、絵描き

『好きなもの』

歌、絵、動物

『嫌いなもの』

騒がしい人、動物を虐める人、酷い人

『容姿』

【紗津希】金色の眼に黒髪に少量の青髪が入ったメッシュのポニーテール。体つきはアイドル体系。胸はC

【楼雅】黒眼黒髪に少量の青髪が入ったメッシュを下で纏めている。体つきはさらしをつけてA程度

『召喚獣』

ダブルソードでチャイナ服

『詳細』

文月学園二学年Fクラスに通うことになった男装女子高生。女子だと知っているのは学園長、高橋先生、西村先生、会員ナンバー二桁の方のみ。ネットアイドルをやっており、ネット内では知らぬ人などいないほどの人気。また、両声類で、男声で歌ったりもしている。CDやドラマCD、合唱など、様々な所で活躍している。路上演奏が趣味で、自身のブログで数十分前にどこでやるかを告知し、演奏ということをしている。絵を描くのも趣味で、自身のブログにも載せたりしている。その絵も小説の挿し絵になったり表紙になったりと人気。また、小説や漫画、動画、アニメなどをネット内の友達と作り、ブログに載せている。ブログのマル秘部分に会員にだけ知らされるパスワードを入れると楼雅の写真を見ることが出来る。文月学園には楼雅の姿で通うが、会員の人には余計な面倒は避けたいから黙秘して貰っている。もし言ったりしたら引退すると断言したりしているので、もし言おうものなら周りの会員ナンバー達に制裁される。楼雅はイケメンで校内イケメンランキング&彼氏にしたいランキング堂々の一位になっている。

『名前』

【本名】桜華・S・T・天月 オウカ・スカーレット・ティレイ・アマツキ

【アイドル名】Scarlet Blizard

【アイドル名／通称】吹雪 フブキ

『性別』

女性

『年齢』

17歳

『クラス』

F

『部活』

帰宅部

『職業』

【正業】学生

【副業】ネットアイドル、声優

『趣味』

私とAクラスと一緒に

『好きなもの』

私とAクラスと一緒に

『嫌いなもの』

私とAクラスと一緒に

『容姿』

私とAクラスと一緒に

『召喚獣』

私とAクラスと一緒に

『詳細』

私とAクラスと一緒に。

変更点は

- ・女オリ主と共に歌手をしている
- ・AクラスからFクラスへ
ぐらい

『恋姫＋無双』俺、最強になるのこ

死。

それは唐突にやってくる。

それは様々な形でやってくる。病死、事故死等……それは俺も同じだ。

「で？その自称神とやらはどうやって償ってくれるんですかあ？ていうかミスで人殺すとか馬鹿なの？死ぬの？いや、もう死んでいいよ？俺が許す。」

「……ぐすん。」

俺は今、テンプレというものを実際に味わっている。死に方は突発的な心臓死。部屋で漫画を読んでいたら意味不明な理由で殺されたんだ。毒ぐらい吐くのは当然だろう？

なに？あんたは吐かないの？良心的だねえ……俺なんか率直にいうよ？『ウザキモツ。近寄らないでくんねー？超キモいんすけどー、ちよっ、マジで近寄んなって！息くせえんだよっ！！』ぐらいは普通にはくぜ？当然だろ？

……え？なに？俺がずれてんの？はっ、んなわけねえか

「さっさと答えろウスノロが……。なんですかぁ？なんなんですかぁ？テメエは俺を殺しといてなんにもなしで逝かせるつもりなんですかぁ？馬鹿じゃね？馬鹿だろ？馬鹿なんだな？さっさと説明しろや馬鹿が。」

「……ひぐ……、ごめ……ごめんな、さ……っ……い……ひう……」

悪魔？そんなのここにはいねえよ？ただの善良な一般市民と無能がいるだけだぜ？

なんだ？俺が悪役だっていうのか？どっからどうみてもあっちが悪役だろうが……あんたの目は大丈夫かぁ？眼科いく？大丈夫、良い医者がいるから。闇医者なんだがな？いい腕してるんだよ……まあ、ゲイなんだがな（ボソツ

「仕方ねえなあ……俺を恋姫無双の世界に送って、チートオリ主にしたら許してやんよ。……さっさと返事しやがれっ！！」

「ひゃ、ひゃいいいっ！！！！！！」

まったく……手間とらせやがって……奴隷にしてやろうか……

あ？冗談だよ。神を奴隷にできたら儲けモンだろうが……できやしねえよ。ただの人間にはな。

知ってるか？こういうテンプレは大体が心読まれるんだぜ？

……あのように

「……………（プルプル）」

おお、震えてやがる。ちなみにだがこの神は銀髪碧眼の美人だ。…
…本気で奴隷も考えていいかもしれない。

……遅いなあ……そんなに遅くなるようなこと言った覚えなんかな
いんだけどなあ……そんなにSMプレイでもしたいのかなあ……

「……………（ブンブン）」

違うってか？ならさっさとやれやっ！……外道？ナニソレ？オイシ
イノ？

転生者はレディアント3に参入す

俺の名前はウエルディア・キャスタニエ。テイルズのレディアント
マイソロデイの世界に転生させられた者だ。

使う魔法は色々……とだけ言っておこう。現在の俺の年齢は17歳。
容姿は銀髪に赤色のメッシュ。目つきは少々鋭い。目の色は綺麗な
水色。全体的に見るとクールなイケメンといったところ……らしい。
なんでも神に決められたからよくわからないんだ。こればかりは仕
方がない。

職業は双銃士。所謂オリジナルの職業だ。双銃士とはガンマンと双
剣士を極めた者が使える職業にあたる。武器は神託詠師謡将大剣に
黄金銃を組み合わせた物とトライアルブレード にトライアルガン
を組み合わせた物を使用している。世間一般で銃剣という物がある
だろう？アレの逆になるだけだ。つまり、銃を主体に剣を付けるの
ではなく、剣を主体に銃を付けるのだ。テイルズ内では特殊武器の
中に確実に入る品物だな。服装はFF?のセフィロスの格好ってい
えばわかるかな？わからない人はWiki先生に教えて貰うといい。
俺は今からアドリビトムに入る為にバンエルディア号に向かってい
る。なんでも近くに停泊しているらしい。……と言っている間に着
いたな。

む？丁度良いところに人が……

「すまない。」

「あら？どちら様かしら？」

「む。これは失礼した。俺の名はウエルディア・キャスタニエと言う。ここはアドリビトムで合っているか？」

「合っているわよ？私はアンジュ・セレーナ。貴方の言うアドリビトムのマスターをしているわ。」

合っていたみたいだ。いや、これで外れていたら面倒だからな。移動するギルドを探すのは疲れてならない。

「……キャスタニエと言うことはもしかして…？」

「……もしかしてエミルがここに？」

「やっぱり！エミルくん！ちょっと来てくれないかしら？」

「あ、いや別に……」

むう……話を聞かない人物はどこにでもいるのだな。面倒は嫌いなのだが……まあ、久々の弟に会うのもまた一興かな？

「アンジュさん、呼びまし……た……？」

「久しぶりだな。元気にしていたか？」

「に、兄さんっ！」

驚きで目を見開くエミル。まあ、仕方ないかもしれないな。俺が旅に出たのが約11年前。つまり俺が6歳の時だからな。

ということはエミルが5歳の時に…ということになるのか。いやはや、覚えていてくれたとは嬉しいな。

「エミル。積もる話もあるだろうが、少し待って貰ってもいいか？俺は少しアンジュさんと話があるからな。」

「う、うん。」

「……依頼かしら？」

「いや、このアドリビトムに加入したい。」

「「っ!？」」

「兄さんっ！本当なのっ!？」

「ああ。……で、どうなのだろうか？」

またまた驚きで目を見開くエミルだったが、俺は軽く受け流しアンジュの答えを聞くためにアンジュを見る。アンジュはというと最初、俺がアドリビトムに入りたいと言ったときは驚いたが、今はなにか

ぶつぶつと考え事をしているようだ。

「…軽く自己紹介を頼んでもいいかしら？ 貴方がなにができるのかも含めて。」

「姓名はウエルディア・キャスタニエ。通称はウエルだ。職業は双銃士。魔術は治癒から攻撃、補助と多種多様な。趣味は特にない。あえて言うならば暇つぶしを見つけることだ。特技も特にないな。大体全部できる。攻撃範囲はオールマイティーで、朽絶の翼と呼ばれている。…こんな所か。」

「あ、貴方が朽絶の翼なの？」

「ああ。そう呼ばれているな。」

朽絶の翼。俺が依頼たのねをしている時にいつも魔法の翼を展開させ、その翼の羽を相手に矢のように飛ばして攻撃した後にはなにも残らない事からついた名前だ。

俺的にはこのような厨二病前回な名前はあまり歓迎したくはないのだが…：広まりすぎてこれを名乗るしか自分をわかって貰えない時がある。全く持って面倒だ。普通なら自分の名前の方が広がるはずなのだがな…。

「エミル君のお兄さんだから嘘ということはないのでしょうけど…：いまいち信じられないわね。今から試験をして貰っても大丈夫かしら？」

「ああ。最初からそれぐらいは予想していた。試験内容を教えてくれ。」

仮にもギルド。難しいものや簡単なものもあるだろうが試験は必ずといっていい程ある。場所によってはないところもあるのだが、そんなものは極稀だ。このアドリビドムはギルド内のメンバーは凄く仲がいい。そういう場所はそこまで難しくない課題をだしてくるのだが……その情報があっているかどうかが問題だな。

「そうねえ……じゃあ手っ取り早くうちのメンバーと戦ってもらうなんてどうかしら？」

「それでいい。」

「じゃあ決まりね。今からメンバーを呼ぶからその中から選んでもらってもいいかしら？」

「ああ。……何人だ？」

「三人よ。」

おいおい……ずいぶん簡単にいつてくれるな。強い奴らが集まるこのギルドの中の三人と戦えとは……ずいぶんと厳しい加入条件を出されたものだ。……まあ、勝って見せるがな。

「集まったわよ。説明も簡単にして置いたわ。じゃ、選んで頂戴。」

「……仕方がない……か。では、君にお願いしようか。」

「俺か？」

俺が指名したのは黒髪の青年。おそらく剣士だろう。

「ああ。俺の名前はウエルディア。君は？」

「俺の名前はユーリ・ローウエルだ。よろしくな！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0086x/>

思いつき集

2011年12月20日17時52分発行